

# 亀ヶ崎城跡

## 第2次発掘調査報告書

財団法人  
山形県埋蔵文化財センター



6-1994-736-01

1994

1994
736
6

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

かめ が さき じょう あと  
**亀ヶ崎城跡**  
**第2次発掘調査報告書**



平成 6 年 3 月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

094 - 736

## 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、亀ヶ崎城跡第2次の調査成果をまとめたものです。

亀ヶ崎城跡は山形県の北西部に位置する酒田市にあります。

酒田市は環日本海貿易都市として、木材や農産物等の商工業製品の積み出し港として目覚ましい発展を展開しております。

調査は、貞享年中亀ヶ崎城跡に描かれた二の丸中心部にあたる地区を調査し、城代の屋敷跡と考えられる礎石列や、北邊帰船によって運び込まれた陶磁器等が発見され、江戸時代の生活様相が窺いします。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な遺産といえます。私たちは国民的財産の文化財を大切に保護し、さらに郷土の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。一方、平和で豊かな暮らしは私たちが等しく切望しているところです。近年高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

事業区内の遺跡の調査は、埋蔵文化財と開発事業実施のため、適切かつ迅速に行われる事が今日求められています。こうした要請に適切に対応するとともに埋蔵文化財調査体制の充実を図ることが急務とされ、平成5年4月に財団法人山形県埋蔵文化財センターが設立されました。職員一同、県民と関係各位の要望に応え本県の埋蔵文化財保護のため一層の努力をいたす所存です。今後とも当センター発足の目的が達成されるようご支援ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

本書が文化財保護活動の啓蒙普及、学術研究、教育活動などにおいて皆様のご理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成6年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
理事長 木場 清耕



碳石鹼物語（上空15m以上）



## 例 言

- 1 本書は山形県立高等学校校舎等整備事業に係る「亀ヶ崎城跡第2次」発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県教育庁文化課の調整を経て、教育庁総務課の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。
 

遺 蹤 名	亀ヶ崎城跡 (ASTKJ-2)	遺跡番号	2071
所 在 地	山形県酒田市亀ヶ崎1-3-60		
調査期間	発掘調査 平成5年4月1日～平成6年3月31日		
現地調査	平成5年5月11日～平成5年8月4日	延べ	63日間
調査主体	財団法人 山形県埋蔵文化財センター		
発掘調査・資料整理担当者	調査研究課長 佐々木洋治		
	主任調査研究員 野尻 侃		
	嘱託職員 川田 嘉信		
- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県教育庁総務課、山形県土木部建築課、庄内支庁建設部建築課、山形県立酒田東高等学校等関係機関の協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。
- 5 本書の作成・執筆は、野尻 侃、川田嘉信が担当した。編集は安部 実、伊藤邦弘が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。
- 6 遺構平面図については、株式会社シンジケーションが実測業務を委託した。
- 7 出土遺物、調査記録類は、山形県埋蔵文化財センターが括保管している。

## 凡 例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は以下のとおりである。
 

S B …… 墓石建物跡	S D …… 溝 跡	S X …… 性格不明遺構
E B …… 墓 石	R P …… 完形・一括陶磁器	R S …… 石製品
RM …… 全属製品	RW …… 木製品	
- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。
- 3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
  - (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
  - (2) グリッドの南北軸は、N-38°-Eを測る。
  - (3) 遺構実測図は1/40, 1/100、遺物実測図は1/2, 1/4, 1/8縮尺で採録し、各捕図毎にスケールを付けた。また、遺物実測図中のスクリーントーンは塗り部分を示す。
  - (4) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とも共通にした。
  - (5) 遺物観察表中( )内数値は、図上復元による推計値、または残存値を示している。また、出土地点欄の層位では、Fは遺構覆土出土、ローマ数字は遺跡を覆う土層(基本層序)を表している。
  - (6) 遺物観察表中の色調の記載については、1993年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によった。
  - (7) 遺物観察表中の計測値及び、形状特徴、装飾、製作等の欄は東京都新宿区細工町遺跡報告書凡例基準や、同内藤町遺跡調査会(江戸のやきものと暮らし)を参考とした。

## 目 次

序	
卷頭カラー写真	
例 言	
目 次	
I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	2
II 遺跡の立地と環境	
1 遺跡の立地	3
2 歴史的環境	3
III 検出された遺構	
1 遺構の分布	7
2 S B 1 碓石建物跡	7
3 石 列	8
IV 出土した遺物	
1 遺物の分布	11
2 陶磁器	11
3 土 器	26
4 土製品	26
5 木製品	26
6 石製品	26
7 金属製品	26
V 調査のまとめ	27
報告書抄録	28

## 挿 図

第1図 調査概要図	1
第2図 亀ヶ崎城跡と周辺の城館跡	3
第3図 貞享年中亀ヶ崎城図	5
第4図 S B 1 碓石建物跡	8
第5図 連携配置図	9
第6図 遺跡の層序	9
第7図 出土遺物実測図(1)	12
第8図 出土遺物実測図(2)	13
第9図 出土遺物実測図(3)	14
第10図 出土遺物実測図(4)	15
第11図 出土遺物実測図(5)	16
第12図 出土遺物実測図(6)	17
第13図 出土遺物実測図(7)	18

## 図 版

図版1 調査区全景 遺跡の層序	
図版2 S B 1 碓石建物跡 EX 6 0 木枠組遺構検出状況	
図版3 R P16・32・37・58・131・172・173・183, RW178・木蓋・木製品出土状況	
図版4 R P25陶質人形, RP38亀型土製品, RP36鶏型土製品, RP59吉祥皿, RM46把手, 三島手唐津陶器皿, 底板出土状況, 調査風景	
図版5 梵頬, 坏頬(磁器)	
図版6 梵・环・化粧具, 仙神具	
図版7 化粧具, 鉢, 壺類	
図版8 鉢, 加熱具	
図版9 土・陶質人形, 飯事道具	
図版10 木製品	

## 付 表

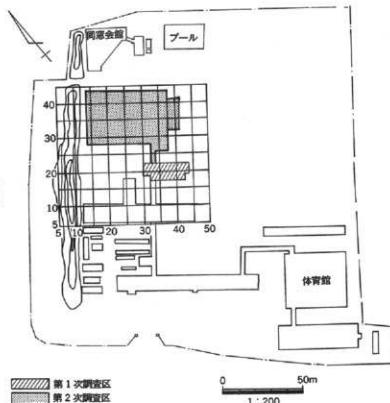
表1 亀ヶ崎城跡調査工程表	2
表2 亀ヶ崎城の変遷	4
表3 亀ヶ崎城代在任一覧表	6
表4 出土遺物観察表(1)	19
表5 出土遺物観察表(2)	20
表6 出土遺物観察表(3)	21
表7 出土遺物観察表(4)	22
表8 出土遺物観察表(5)	23

## I 調査の経緯

### 1 調査に至る経過

東北地方日本海に面した酒田市は海上交易による経済発展に目覚ましい進展を示している都市である。酒田市は室町時代以前には坂田村と呼ばれた寒村であったが、江戸時代に入ると、最上川河口に発展した日本海交易の湊町として栄え、町を守る要として亀ヶ崎城が構築され、出羽庄内藩の経済を支える町並みを呈していた。

亀ヶ崎城跡は、その後明治時代以降は酒田県庁、旧制酒田中学校、県立酒田東高等学校と公設の施設箇所となり、現在に至っている。平成2年度には校舎新築事業が実施され緊急発掘調査（第1次）が行われ、貞享年中図（第2図）に描かれた本丸と二の丸との境界を示す堀跡や土塁跡と共に江戸時代の生活用具が多数発見された。平成5年度には県立高等学校校舎等整備事業（体育館）が計画され、山形県教育庁文化課は事業実施課である県教育庁総務課と協議を重ね、建設予定である体育館の範囲に限り、緊急発掘調査を実施することで合意を得た。このことから平成5年4月26日には総務課、酒田東高等学校事務部、県土木部建築課、庄内支庁建設部建築課と発掘調査事前打ち合わせ会を行った。また、調査は財団法人山形県埋蔵文化財センターが行った。



第1図 調査概要図 (S = 1 : 200)

## 2 調査の経過

- 発掘調査は平成5年5月11日から8月4日までの延べ63日間を第2次発掘調査として実施した。調査では第1次調査での調査内容や調査で計画された調査区の基準を踏襲し、2m単位のグリットを建設予定地の範囲に設定した。以下に調査の経過を略述する。
- 5月11日～21日 機材搬入 調査時の安全祈願 調査範囲の安全対策施設設置 調査区設置作業 重機導入による盛土除去 調査区粗掘（地表下140～160cmで江戸時代の文化層を確認、地表下140cmまでは盛土層）
- 5月24日～31日 重機導入後の面整理 調査区全景写真撮影
- 6月1日～18日 調査区を10m単位に小区割し、手掘による包含層掘り下げ。近世陶磁器多数出土。調査区東部に幅120～160cmの溝状遺構を南北に検出。この期間は降雨の日が多く作業が難航した。
- 6月21日～30日 出土遺物の出土地点平面測量 遺物出土状況写真撮影 検出遺構平板測量 調査区中央部に礎石と考えられる上面が平坦な石と東側に南北走る溝状跡を検出し、SD58溝状遺構と呼称する。
- 7月1日～16日 2回目の重機導入 SD58掘り下げ SD58に角柱で囲まれた板材を検出SX60と呼称 陶磁器、土人形、鉄製品、木製品多数出土
- 7月16日～30日 SX60を中心とした礎石列を検出、礎石建物跡と確認 30日には調査成果を～8月4日 公表する説明会を開催し、8月4日に機材を撤収、調査を終了した。

表1 亀ヶ崎城跡調査工程表

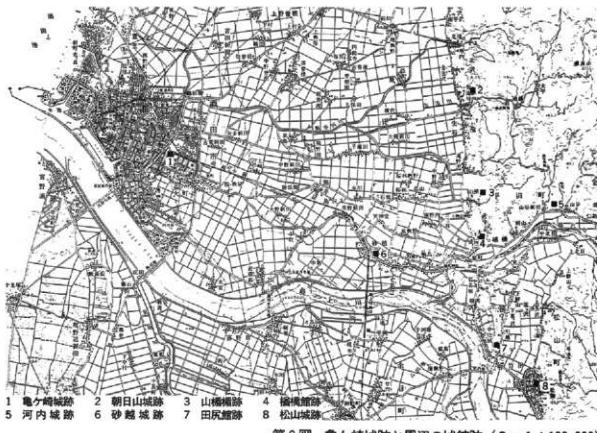
作業項目	5月					6月					7月					8月					
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	
機材搬入・環境整備																					
グリット設定・トレーン調査																					
表土除去（重機）																					
手掘り・面削り																					
遺構検出・精査																					
記録（写真撮影等）																					
写真測量																					
機材搬出																					
備考																					
	調査開始	機材搬入式	調査終了式	機材撤収																	

## II 遺跡の立地と環境

## 1 遺跡の立地

吾妻、飯豊山系を源とした最上川は山形県内陸部を貫流し、内陸盆地の中小河川を合流させながら北流する。北流した最上川は最上地方で西流し、出羽山地を断ち切るように庄内地方に広大な沖積平野を形成する。平野を蛇行した最上川は、出羽山地から源を発する中小河川を集合し、酒田市街地の南部で日本海に流れ出る。出羽山地から源を発した新井田川は、最上川の河口で合流し広大な三角州を形成している。

亀ヶ崎城跡はこの合流した自然堤防上の微高地に築城されている。標高は3～3.5mを測る。城域は新井田川をはさんで左岸が本丸と二の丸、右岸に三の丸を配した水城的性格を持ち、要地酒田の城として十二分にその機能を果たしている。



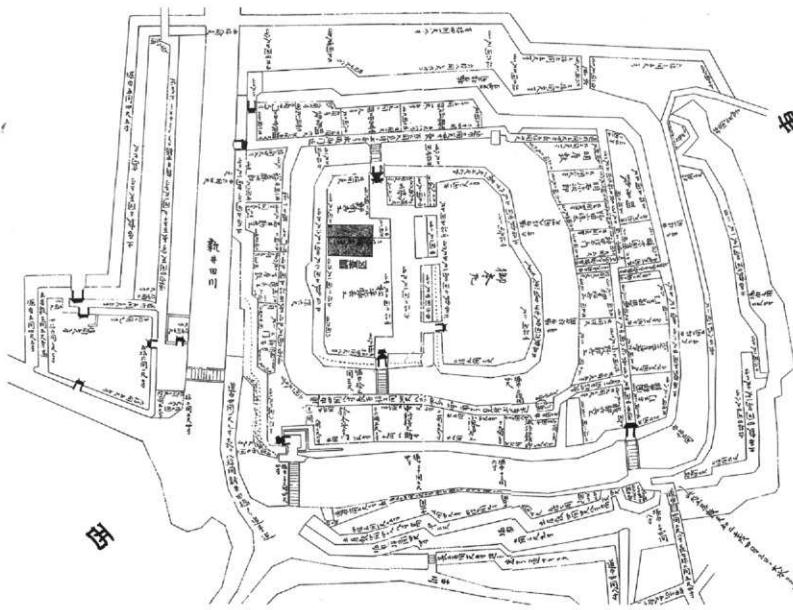
第2図 亀ヶ崎城跡と周辺の城館跡 (S = 1 : 100,000)

## 2 歴史的環境

酒田の街は出羽の国内外を代表する港町として最上川河口に発達した交易拠点を形成している。また、市街地東部には、平安時代に出羽の国の国府として推定された、国指定史跡「城輪柵跡」が存在し、古くから中央との交流があったと考えることができる。

## 表2 鬼ヶ崎城の変遷

不 并	い勢力が形成し、東御守と並んで鬼ヶ崎城を修する長官守の者が登場する。
1466 文正 1	源氏・大内守・源氏主近江守が、東御守と並んで鬼ヶ崎城を修める。長は東御守・たなは源田氏。
1467 文正 2	応仁の乱ははじまる。(~1477)
1478 文明 10	源元・東御守城主源氏主近江守と並んで鬼ヶ崎城を修める。
1512 永正 9	美濃守金時・大宝寺守・源氏主近江守と並んで鬼ヶ崎城を修める。
1538 天文 7	武藏守朝・東御守城主と並んで鬼ヶ崎城を修める。
1562 天正 10	本守守の死。國守伊賀無能用。
1563 天正 11	武藏守朝・東御守城主と並んで鬼ヶ崎城を修める。源氏主近江守は守る。
1564 天正 12	前後三箇月の合戦。東御守城主と並んで鬼ヶ崎城を修める。
1565 上杉・武蔵守と源氏主近江守と並んで鬼ヶ崎城を修める。	上杉・武蔵守と源氏主近江守と並んで鬼ヶ崎城を修める。
1567 天正 15	秀吉・本守守の死。鬼ヶ崎城を修める。
1568 天正 16	義上義光・伊藤宗説の対立対決。上杉守の本守守義光、鬼ヶ崎城の主守日で斎藤義光の十五歳の娘の夫となる。東御守城主と並んで鬼ヶ崎城を修める。
1569 天正 18	秀吉の第一上杉義光、出羽守の地位を譲る。
1571 天正 19	秀吉・本守守義光の所領改め。上杉に与える。東御守城主と並んで鬼ヶ崎城を修める。
1599 廉長 4	志田形義兵衛・東御守城主となる。川村兵長・平政としての東御守城主を修める。
1600 廉長 5	岡ヶ原の軍。岡ヶ原守出羽守もはじまる。
1601 廉長 6	義上義光・上杉守の東御守城主を以て守門を修める。鬼ヶ崎城主3万石に志村守正守。
1603 廉長 8	巣川家義後守城主となる。義光・東御守城主と鬼ヶ崎城・大宝寺城を繋ヶ原城に改称。
1611 廉長 11	鬼ヶ崎城主志村守安が守める。九郎守清光を継ぐ。
1614 廉長 19	義上義光が守る。九郎兵衛守・清光開城時に解体される。
1615 元和 1	徳川秀忠・一国一家の制を定める。庄内では、鬼ヶ崎城の二成が守に許される。
1622 元和 8	義上氏昌はさる。岡ヶ原守・庄内守入選(11万石)・鬼ヶ崎城守を守護。鬼ヶ崎城守を守護。庄内守入選が守護となる。庄内守入選の守護が守護となる。守護11名・守物120石。
1672 宽文 12	前年の東御守城主が守護に能く、義上・源氏主が守護に能くと記載される。
1713 正徳 3	『福井年記』に、この年、西田城代忠勝が守護となる。
1766 明治 1	戊辰戦争(~1868)。庄内守主鍋井忠勝が守護となる。
1880 明治 13	廢藩置県。西田は才木県を経て酒田県となる。その盆地をより壊し地盤とする。
1920 大正 9	県立西田中学校創立となる。(現在の県立酒田東高等学校)



第3図 真享年中鬼ヶ崎城図

港と穀座豊かな平野を背後にひかえた酒田は、戦国時代群雄割拠の武将には魅力的な土地でもあった。亀ヶ崎城跡の築城年代について、筆濃鈴理（註1）に天平年中頃と推定されている。しかし、建久2年（1191）東禅寺城主武藤出羽守が、城内に八幡神社を創建したと記録もあり、その築城年代は不明である。いずれにしても15世紀後半には東禅寺城と呼称され、巴城ともよばれていた。堀と土塁で囲まれた縄曲輪として整備されている。また、城を囲む袖ノ浦周辺を整備し、新井田川等の河川による船運を興し、町衆が主体となった自治機能を発揮させ、活気ある商業都市を形成していた。織豊時代の天下統一の権力が強まるごとに、町衆の自治機能が否定され、酒井家が入部するころには、幕府や藩の行政機構に組み込まれた。

出羽庄内藩は、元和元年（1615）徳川秀忠は一國一城の制を定めるが、鶴ヶ岡城と亀ヶ崎城の二城が特に許される。亀ヶ崎城は鶴ヶ岡城の支城として城代がおかれ、城下の治安や行政・軍事面での責任者となる一方、商品流通の拠点となる酒田港の維持にも携わっており、施政上重要な役割を担っていた。

註1 安倍親任 筆濃鈴理上巻 鶴岡市史 資料編 1977

表3 亀ヶ崎城代在任一覧表

城代氏名	在任期間	城代氏名	在任期間		
松平 善三郎	寛永8 寛永6	1622 629	酒井 弾正	文化8 文化10	1811 1813
白井 悅右衛門	寛永6 寛永8	1629 1631	里見 外記	文化10 文化13	1813 1816
松平 善三郎	寛永8	1631	松平 武右衛門	文化13 天保5	1816 1834
松平 九郎兵衛	承応1 万治1	1652 1658	杉山 弓之助	天保12 天保14	1844 1843
松平 藤兵衛	寛文10 元禄16	1670 1703	松平 善三郎	弘化2 弘化3	1845 1846
松平 善三郎	亮保17 元文4	1723 1739	酒井 奥之助	弘化3 弘化4	1846 1847
酒井 団書	寛延1	1748	服部 淵兵衛	嘉永2 嘉永5	1849 1852
松平 善三郎	宝曆1	1751	松平 舎人	嘉永6 安政6	1853 1859
酒井 団書	宝曆13	1763 安永6	酒井 奥之助	安政6 安政7	1859 1860
竹内 五兵衛	安政10 寛政7	1781 1795	加藤 宅馬	安政7 慶応4	1860 1868
酒井 内匠	寛政7 寛政11	1795 1799	朝岡 助九郎	慶応4 明治2	1868 1869
酒井 吉之允	亨和2 文化7	1802 1810			

資料 酒田市史改訂版上巻より

### III 検出された遺構

#### 1 遺構の分布

亀ヶ崎城跡は江戸時代に出羽庄内鶴ヶ岡城の支城として港町酒田の発展を支えていた。発掘調査では、明治時代に廃城後は公的施設の設置箇所として利用され、数枚の埋土層が堆積しており、城内の施設が設置されては破壊され廃棄物として埋められたものと考えられる。

これらのことから、現地表面下1.4m～1.6mに亀ヶ崎城廃城後の埋土層が確認され、層内からは、陶器器や、木製品、金属製品等の遺物が出土した。また、整地層の下部では長径60～85cmの自然石が等間隔に並び、自然石の上面が平坦になることから建物跡の礎石と考え、周辺を面整理しながら建物跡（SB 1）の広がりを確認した。検出した部分は調査区の南東部、27～34-30～36グリッドである。建物跡と考えられた範囲内には、板材で囲まれた方形の施設が四隅を角材に支えられた状態で検出された。

そのままの調査区域では、礎石と同レベルに小礎が線状に集中して検出され、羅敷の境を示す列石遺構と考えられる。

また、調査区の中央部25-16～19、25-21～23グリッドで検出された礎石列（E B81～E B83礎石、E B72～E B75礎石）は建物跡の礎石列と考えられるが、SB 1とした建物跡と組み合わさることが出来なかった礎石列である。しかし、この2列の礎石列は東西方向に線上に並び、建物跡の一部とも考えられるが先述したとおり、SB 1建物跡との主軸方向がやや南にずれていることや、礎石間の柱間が不規則な間尺を呈していることなど建物跡としての組み合わせにならなかったことによるものである。

#### 2 SB 1 級石建物跡（第4図、図版4）

調査区の南東部、27-34-30～36グリッド4層下面で検出した東西6間以上、南北5間以上の礎石建物跡である。建物跡は確認された梁行（E B68～71）長13.2m以上、桁行（E B62～68）長10.5m以上を測る。柱間距離は、梁行E B68～71礎石間は、E B68礎石から0.9m（3尺）、1.8m（6尺）、7.8m（26尺）を測るが、E B70とE B71礎石との柱間は梁行としての間尺が大きく、その間に1～2本の柱が存在するものと考えられ、建物範囲外の東側には礎石と思われる平坦な自然石が散乱している。桁行E B62～68礎石間は、E B62礎石から1.8m（6尺）、5.7m（19尺）、1.8m（6尺）、1.5m（5尺）、2.4m（8尺）を測り、E B63、E B64礎石との柱間距離が大きく1～2本の柱が存在していたものと考えられる。

また、E B64とE B65礎石に対となる東側に0.9m（3尺）の柱間距離をもったE B77、E B78礎石が確認され、方形になった建物跡内の納戸の施設と考えられる。またE B78からはE B65との線上に1.2m（4尺）等間にE B79、80礎石が並び、建物跡の間仕切りとなる礎石列と考えられるが、E B80礎石以降に線上に並ぶ礎石が検出されなかった。

これらの礎石には根固めとなる小礎は検出されなかったが、E B64礎石は二枚の偏平な自然石が重なって確認されており、柱の調整で2枚に施されたものと考えられる。

E B77礎石の北約1.3mには、一辺30～35cmの角材が1.2m（3尺）等間に方形に打ち込まれ

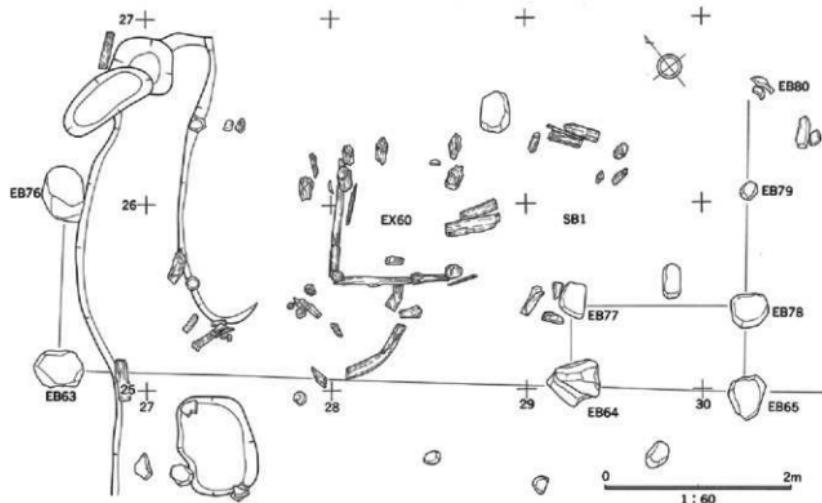
ている。EX60性格不明遺構と命名し、SB1建物跡内の付属施設として設置されたものと考える。

角材はいずれも手斧による面削りが施され、建物跡の柱として利用されたものと思われるが、柱は礎石の上に乗ったものではなく地中に打ち込まれた状態で確認されている。建物の土台柱として設置されたものと考えられる。角材の周囲は厚さ3cmの板材によって囲まれ、内部の土砂は泥炭となっている。

SB1礎石建物跡が検出された地区的埋土は、礎石が検出される上部まで整地による埋土層で、層内からは茶碗・皿・壺・甕・擂鉢・杯等の陶磁器や、陶質人形・土質人形・古鏡・釘等の遺物が出土している。また、EX60遺構の周辺からは加工された木製品と木端が多数出土している。

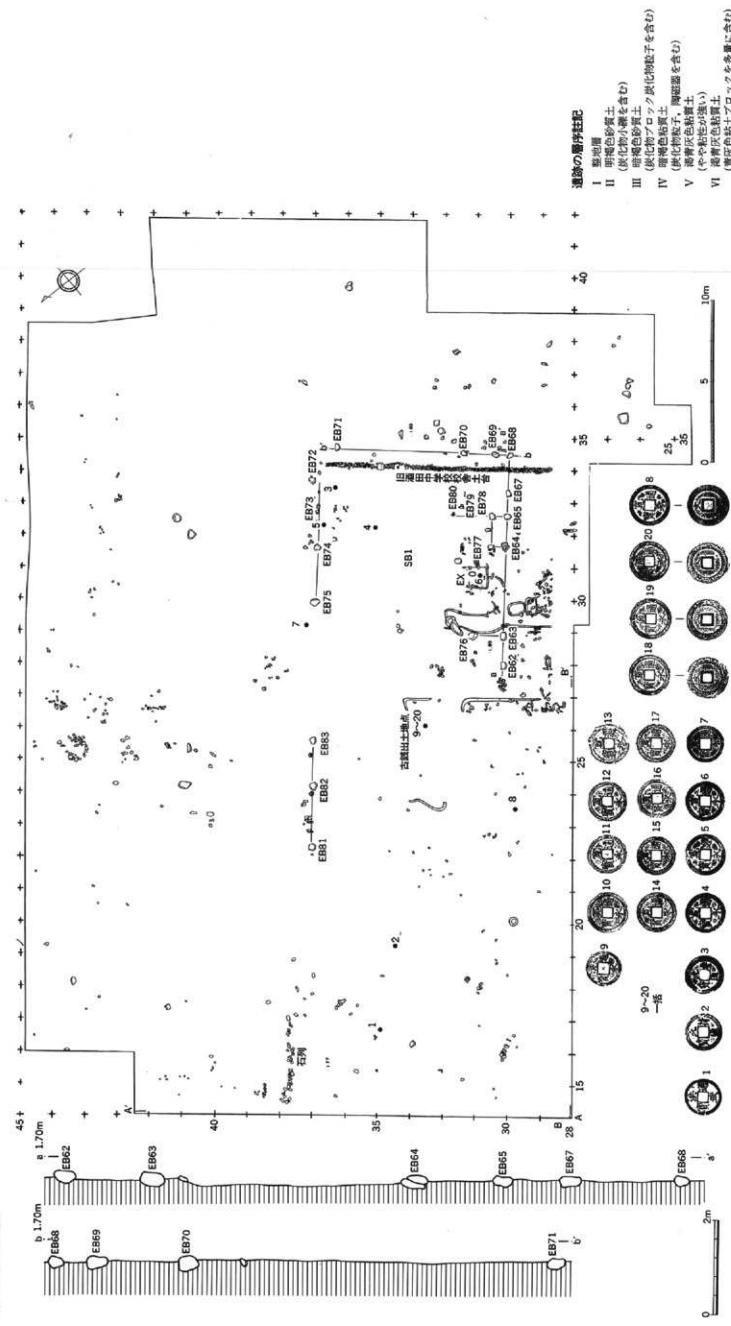
### 3 石列(第5図)

調査区14~18-24グリッド3層下面で検出された握り拳大の自然石が整然と線上に配置されており、屋敷間の境として配置されたものと考えられる。石列は幅35~60cmをもち、上部に塀等の構築施設の土台と考えられる。周囲の埋土層からは、茶碗・皿・擂鉢等の陶磁器が出土している。また、SB1建物跡のEB67礎石とEB68礎石間に検出された石列は、旧制酒田中学校校舎の土台となるもので、調査区北部に存在していた武道館へ通じる渡り廊下の土台固めの配石である。

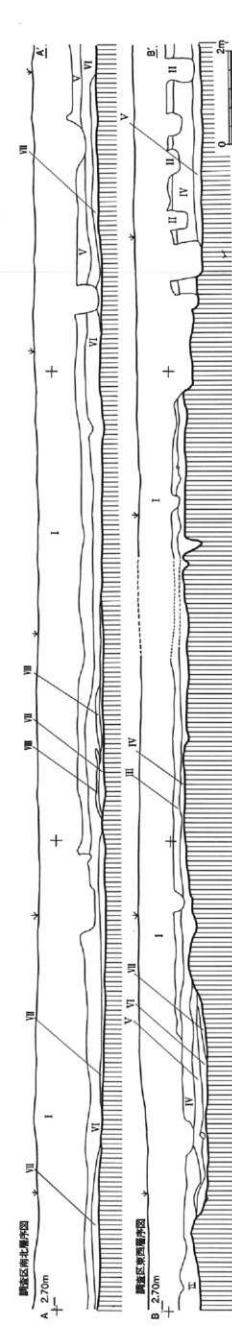


第4図 SB1礎石建物跡

III 検出されたに遺構



S1-1発掘工事検出工レポート (S = 1 : 20)



第6図 連続の層序 (S = 1 : 40)

## IV 出土した遺物

### 1 遺物の分布

調査で出土した遺物は整理箱にして総数67箱を数える。そのほとんどが陶磁器であるが、そのほかには煙管・硯・土製人形・木製品・石製品等がある。これらは調査区内のはんどの区域で出土するが、特に調査区の南東部Ⅳ軸27~39-Ⅹ軸28~34グリッド3層からの出土が多い。しかし、調査区の北半部は旧酒田中学校の校舎が建築されたところであったため比較的の遺物の出土量は少ない。しかし、南半部は旧酒田中学校の中庭部分であったことで、盛土層が残存したものと思われる。このことは、第III章、検出された遺構でのべたS B 1 建物跡の範囲となり、明治期の建物跡が撤去された後に盛土されたため、その整地層に遺物が含まれたものと思われる。また、遺跡が城跡という特殊性から、限られた範囲内での構築物を建築しなければならなかっただといえる。また、遺跡の層序の中で約1.6mもの盛土がなされていることを確認しており、撤去しては整地し、構築を重ねていたものといえる。そのため整地の包含層からは各時期の遺物が混じり合った状態で出土しており、明確な時期の細分は困難であった。しかし、第II章2節歴史的環境で述べた亀ヶ崎城跡の変遷で、文献上では1478年に現在の酒田市四ツ興野付近に東禅寺城として設営されたことが記されている。その後1603年、最上義光氏が東禅寺城を亀ヶ崎城と改名。最上氏改易後の江戸時代には、酒井家が入部し統治している。調査区での出土遺物は酒井家が鶴ヶ岡城を本城とし、亀ヶ崎城を支城とした1622年(元和八年)以降の遺物を主としている。ここでは、出土した陶磁器の器種別や土製品・金属製品・木製品等の遺物を図化し、記述する。

### 2 陶磁器

#### (1) 陶器 (第7~11図・図版5~8)

陶器の出土量は31箱を数える。器類では碗類、皿類、鉢類、片口類、甕類、瓶類、杓子類が出土している。大型の器類が多く、重量も大きい。

#### 碗類

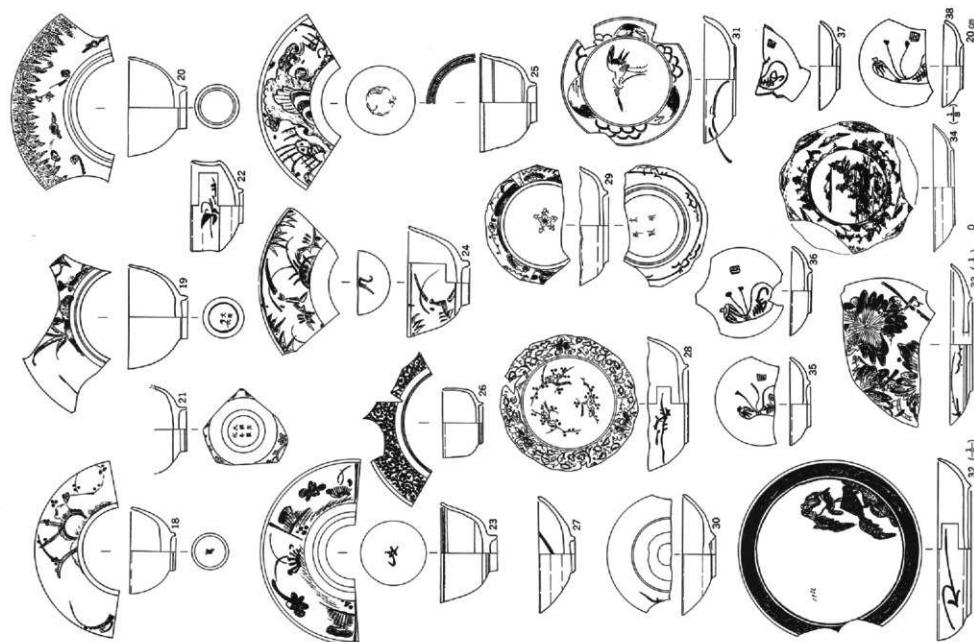
碗は京焼を模倣した装飾形態を示す22の腰折碗である。笹文を描いた美濃瀬戸系の陶器である。3点出土したが、文様施文と計測値が同一であったため一点のみ示した。無い腕と考える。39~50に図示した碗は京焼写しと呼称される一群で、奥須で櫻間山水文や若松を器内面や外面に描いている。高台裏の露胎部には草書で「清水」(39・41・44・48),「木下弥」(46・47),「森」(43),「新」(42),「小松吉」(40)と刻印されている。肥前鍋島藩窯で制作されたもので、御室碗と呼称されている。時期は、1650年代中頃から1680年代に収まるものと考える。

#### 皿類

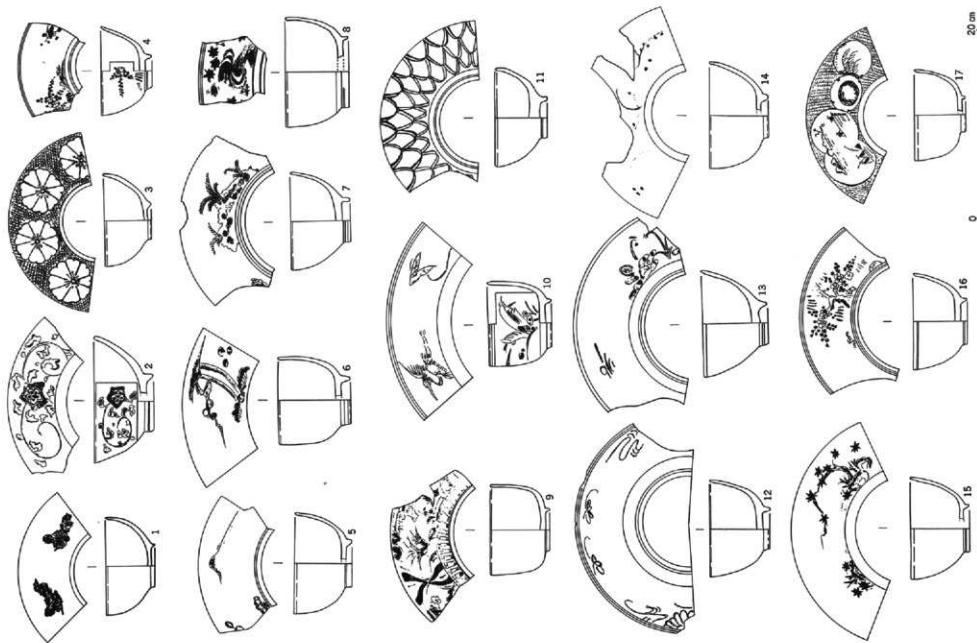
灰釉に施された27・30と31の染め付け皿がある。27・30は波佐見系の「くらわんか手」である。31は内面見込みに鷺絵が描かれた中皿である。

#### 鉢類

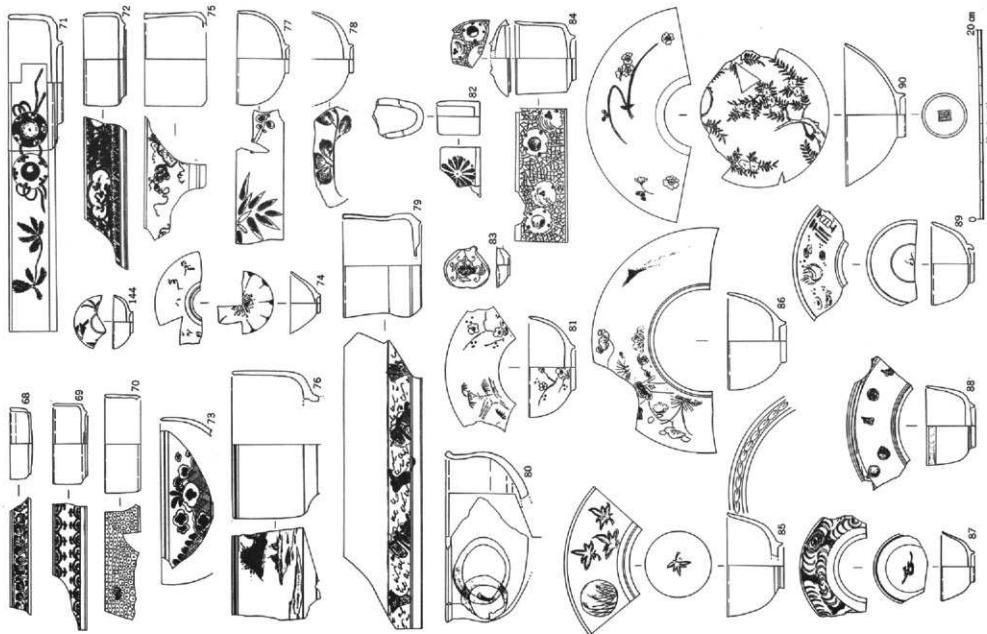
撥鉢が多数出土した。図示出来なかったが破片の觀察では、12条から16条の割り目が放射状



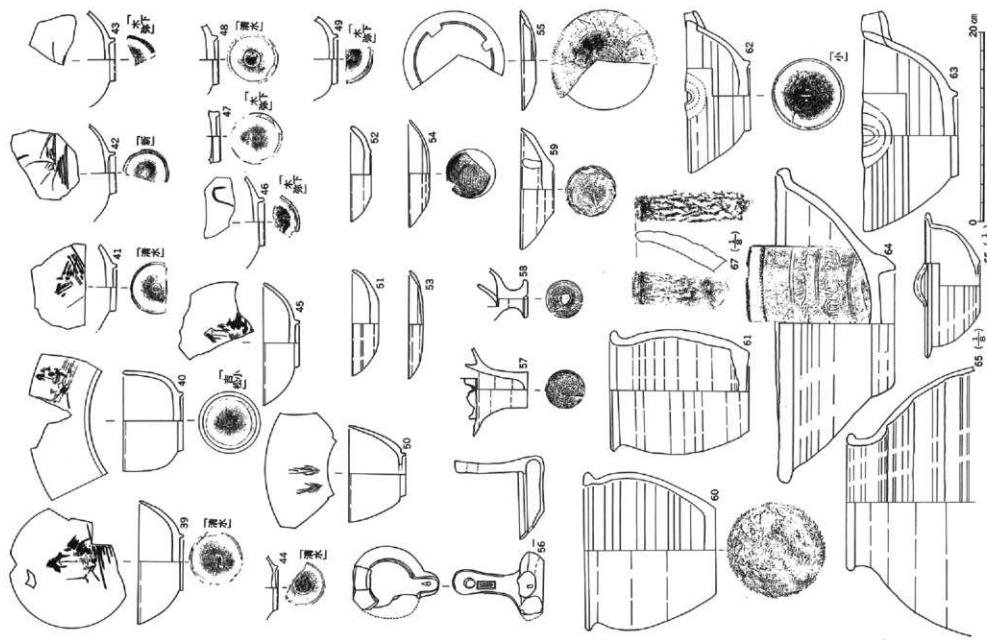
第8図 出土遺物測定図(2)



第7図 出土遺物測定図(1)

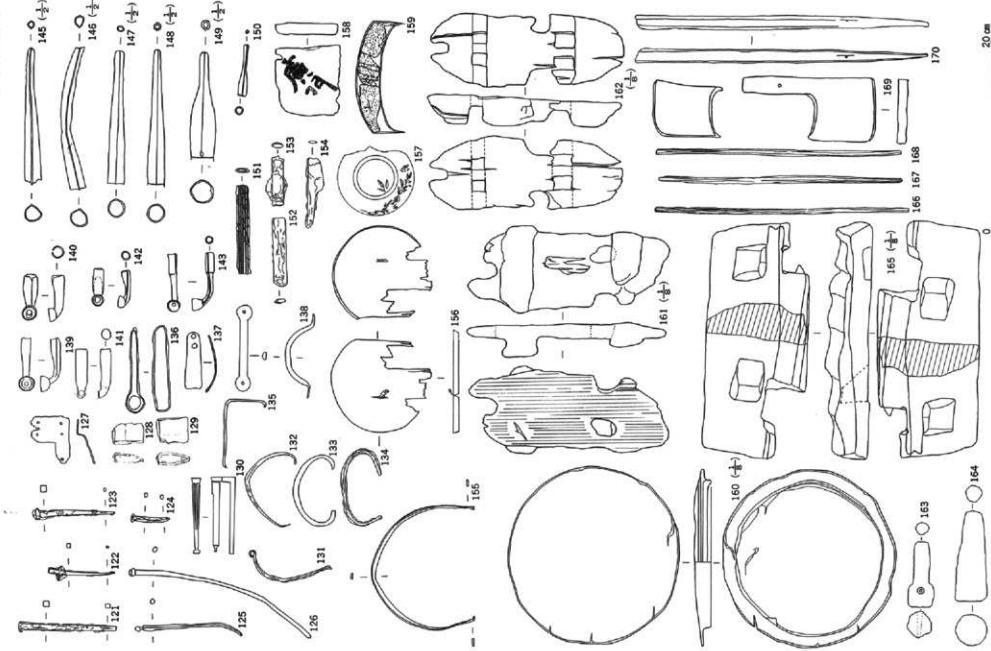


第10図 出土遺物実測図(4)



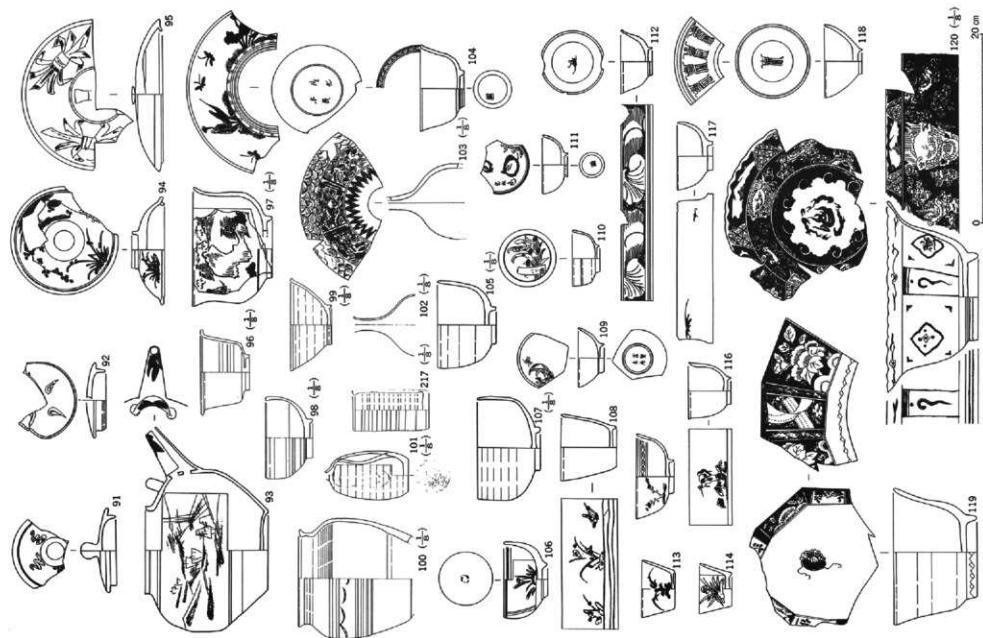
第9図 出土遺物実測図(3)

IV 出土した遺物



第11図 出土遺物実測図(6)

IV 出土した遺物

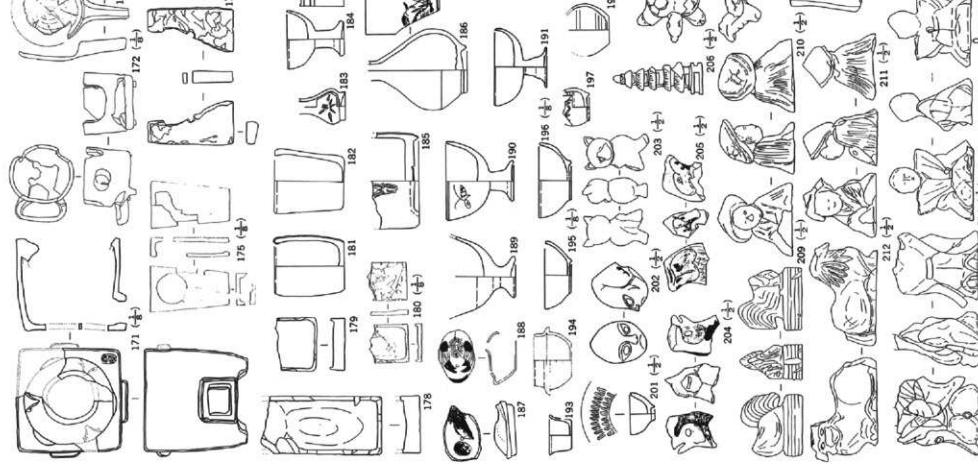


第12図 出土遺物実測図(5)

表4 出土遺物観察表(1)

器物番号	出土位置	器種	形状特徴	法量(mm)	重量(g)	断面	内面	外側	施 工		印・款	施 繕	作 者	備考
									a	b	c	d		
1 15-30V	罐	九型	109.6φ 41	116	輪轉	透明釉	粗面文	暗面	輪轉	輪轉	白	○ヨンカタヤ	肥前高	1000~1050 R/F98
2 S5038F	碗	丸型	107.6φ 31	115	全	灰釉	外側無裏	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
3 22-35Ⅲ	碗	丸型	96.6φ 5	33	全	輪轉明輪	内側文	粗面	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
4 22-35Ⅳ	碗	丸型	96.5φ 3	50	全	輪轉明輪	外側文	粗面	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
5 S5038F	碗	丸型	107.6φ 4	77	台形	輪轉明輪	外側山草文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
6 22-25V	碗	丸型	98.7φ 4	120	全	輪轉明輪	外側竹梅	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~ R/F23
7 22-37Ⅲ	碗	丸型	109.6φ 4	138	全	輪轉明輪	外側文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~ R/F19
8 26-32V	碗	丸型	111.6φ 4	134	全	輪轉明輪	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~ R/F14
9 31-39V	碗	丸型	98.6φ 4	98	全	輪轉明輪	外側文	—	輪轉	輪轉	白	中京	中京系	1050~
10 S5038F	碗	丸型	98.6φ 3	150	全	輪轉明輪	外側雪花文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
11 20-28	碗	丸型	109.5φ 4	173	全	輪轉明輪	外側竹文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~ R/F164
12 27-39V	碗	丸型	106.6φ 4	179	全	輪轉明輪	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
13 35-40V	碗	不規則型	111.6φ 4	68	全	輪轉明輪	外側文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~ R/F15
14 S5038	碗	丸型	113.6φ 4	172	全	輪轉明輪	外側文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
15 S5038	碗	丸型	108.6φ 4	108	全	輪轉明輪	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
16 21-26	碗	丸型	108.3φ 4	113	全	輪轉明輪	外側竹子文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
17 22-26V	碗	丸型	109.5φ 4	107	全	輪轉明輪	外側文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
18 33-37V	碗	丸型	109.5φ 4	162	全	輪轉明輪	外側文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
19 S5038F	碗	丸型	110.6φ 4	68	全	輪轉明輪	外側文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	—
20 35-37	碗	丸型	109.6φ 4	126	全	輪轉明輪	外側文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
21 33-35V	碗	丸型	98.6φ 4	57	全	輪轉明輪	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
22 35-25V	碗	丸型	96.5φ 4	111	全	輪轉	外側花	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~ R/F159
23 35-39V	碗	丸型	109.5φ 4	179	全	輪轉明輪	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~ R/F25
24 25-35V	碗	丸型	109.6φ 4	100	全	輪轉明輪	外側高文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
25	碗	丸型	109.5φ 4	133	全	輪轉明輪	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
26 21-25V	碗	丸型	109.5φ 4	83	全	輪轉明輪	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
27 21-37V	碗	丸型	109.5φ 4	136	全	輪轉	外側竹文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
28 28-35V	碗	花形	109.5φ 4	249	全	輪轉明輪	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~ R/F36
29 27-35V	碗	花形	107.6φ 4	111	全	輪轉明輪	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
30 31-37V	碗	丸型	108.6φ 4	98	全	輪轉明輪	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
31 31-39V	碗	丸型	108.6φ 4	151	全	輪轉明輪	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
32	—	中型	105.5φ 4	313	全	輪轉明輪	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
33	—	中型	109.5φ 4	138	全	輪轉明輪	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
34 33-38Ⅲ	大皿	輪轉	174.4φ 4	732	全	輪轉明輪	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
35 33-39V	大皿	丸型	109.6φ 4	62	全	輪轉明輪	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
36 33-39V	小皿	丸型	96.6φ 4	78	全	輪轉明輪	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
37 33-39V	小皿	丸型	96.2φ 4	34	全	輪轉明輪	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
38 33-39V	小皿	丸型	96.2φ 4	76	全	輪轉明輪	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
39 14-26V	碗	丸型	109.5φ 4	191	全	輪轉	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
40 トランシ	碗	丸型	109.5φ 4	176	全	輪轉	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
41 31-35V	皿	丸型	—	68	全	輪轉	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
42 31-35V	皿	丸型	—	48	全	輪轉	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
43 S5038	碗	丸型	—	25	全	輪轉	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
44 34-38V	碗	—	66.4φ 4	15	全	輪轉	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~
45 16-35V	碗	—	109.3φ 4	57	全	輪轉	外側山文	—	輪轉	輪轉	白	肥前	肥前系	1050~

第13図 出土遺物実測図(7)







**瓶類**

土瓶のみである。93は相馬焼系の帆掛け船鉢である。91・92は土瓶の蓋である。

**壺類**

壺は大・中・小がある。大壺（65）は口径が胴部最大径の約1/2となり、胴部の膨らみが器の中位になるもので、越前焼である。中壺（60）は口径が器高より大きく、胴部の最大径と同じ径である。美濃瀬戸系である。小壺は口径より器高が高く、胴部の膨らみが器高の中位よりやや下にくる。在地産の大宝寺焼である。

陶器でそのほかの器種は、82の髪盤（びんだいり）、83の蓮華がある。髪盤は平面形が細長い梢円形を呈した盤形の容器を指す。整髪の際、五味子（さねかずら）を水に浸して作った整髪料を入れ、櫛を浸すのに用いたもので灰釉菊花文髪盤である。83は舟子彌にはいる。小型でハート形の容器に手がつくもので、手の部分が欠落している。緑釉草花が型押しされている。瀬戸系である。

## (2) 磁器（第7・8・10・11・13図・図版5）

調査で出土した磁器は整理箱にして24箱を数える。器類としては、小碗・中碗・大碗・小皿・猪口・中鉢が圧倒的に多く、大碗・坏・紅猪口・仮鉢具・小皿・蓋物・段重・神酒徳利・水滴がそれに続く。蓋物は、身の出土量に比して非常に少ない。また、そのほかの器種では、うがい茶碗・坏洗い・花生・徳利・人形・玩具等が出土している。

**碗類**

碗は底部から湾曲または屈曲して立ち上がり、手に持てる大きさと重さを持つ容器で、高台もしくは台を備えるものを碗とした。形状では丸型（1・3～5・7・8・11・12～21・24・73・75・76・79・85・86）、筒型（6・9・10・26・40・50・88）、端反型（23・25）、浅半球型（2・39・45・81・87・89・106）がみられ、口径の大きさで121cm～150cmを大碗、101cm～120cmを中碗、100cm以下を小碗に分けた。丸型の大碗の用途としては飯碗・抹茶碗・うがい茶碗等と考える。73は鉄提坏（かねつき）である。口唇部には鉄提水と五倍子粉（ふしのこ）を混ぜ合わせ乾燥したものが付着している。器の外面には赤絵の草花文が描かれており、肥前産の色絵磁器である。90はうがい茶碗と考えられ、焼継ぎ痕がみられる。外面に折松葉に花文、内面に紅葉文が描かれた肥前産の磁器である。中碗とした器の用途としては、飯碗・抹茶碗・煎茶碗・酒杯等である。1・5・18・19・20等は粗雑な文様を描いた波佐見系の「くらわんか手」と考える。しかし19は丁寧な文様の染め付けが施されている。中碗の主文様は、花唐草・菊花・梅花・氷割菊花・蘇鉄・雨降・草花・編目・花鳥等の染付文様が描かれている。小碗とした器は片手の腹で底く持てる大きさで、用途としては湯呑み茶碗・煎茶碗・酒杯等が考えられる。形態的には端反型が多く酒杯として利用されたものと考える。また、内面見込みに五弁花のコンニャク印版が押されたものがある（25）。104の内面見込みには「成化年製」銘がはいる。小碗の文様は26の蛸唐草文や4の草花、6・18の松竹梅文、3の菊花散らし、87の渦文等が描かれている。

**皿類**

皿は底部から湾曲または屈曲して立ち上がり見込みが浅い器を皿類とした。口径の大きさで270cm以上を大皿、120cm～150cmを中皿、100cm以下を小皿と分けた。32は口縁に唐草文、外面に折松葉文、内面見込みに飛鶴風景画が粗雑に描かれた皿である。33は外面に折松葉文内面見込みに牡丹が描かれた皿で、肥前系と考える。34は内面に山水画が描かれている。中皿は輪花皿となる28・29を示した。28は外面に唐草文、内面口縁に花唐草、見込みに梅花が丁寧に描かれている。29は外面に唐草文、内面口縁に花文、見込みに五弁花のコンニャク印版が押され、裏面に「大明年製」銘がはいる。小皿は35～38の内面に瓢箪に寿字と渦巻字銘がはいる揃い皿である。

**段重類**

段重は底部径と口縁径がほぼ同一で、内面口縁に重ねの袖先がある。径の大きい71は側面に鼓文に松葉が描かれた白粉段重と考える。側面の文様が花文（68）、環珞（ようらく）文（69）、龜甲文（70）等が染付された段重である。68は紅入れと考える。

**坏洗い類**

坏洗いの器として確認できる器は119と120である。119は見込みに布袋を描いた八方鉢、内面に鬼面を描いた輪花鉢120である。

**坏類**

坏は薄手酒杯で109の「卯般手」江戸絵付けや、「判じ絵」で短冊に八つ橋の文字が読める110、「錦書」された111等がある。

**鉢類**

鉢は山水画が描かれた97が園化できた。身が深く肉厚な器壁である。

**蓋類**

蓋は身となる鉢が絵模様で一緒になるものは確認されなかった。94は水仙に草花の染め付けが描かれている。95は荷締めが描かれている。肥前産である。

**猪口類**

猪口には酒席で使用される坏と化粧用具として使用される紅猪口がある。106・108～117は酒席での猪口で、並菖蒲（106・108・113・114）、笛文（117）、若松に鶴（116）、並寿字（118）、等の染付けが施されている。74・144は紅猪口である。薄手の杯で器の外縁には、羽根と羽子板が描かれている144と、「是なくハ□口之ノ如シ」の文字が書かれた74があり、両者とも肥前産の色絵磁器である。144は東京都細工町遺跡出土と同一である。

そのほかでは、仮鉢具（184・189～192）、神酒徳利（183・186）、水滴（187・188）、玩具（193・195～197・201～205）が認められる。

### 3 土器（第13図・図版8）

土器としたものは、無釉で焼成されたものを示す。灯明皿（51～55）、七厘（171・172・174）、焰炉（ほうろく）（173）、風口（かざぐち）（175）、炭壺（177）である。灯明皿は「かわらけ皿」と呼称される平形の無高台の皿である。底面が丸形となる53と平底となる51・52・54・55に分けられる。54の底部には静止糸切り痕が残る。七厘は箱形となる171・174、丸形の172がある。焜炉の一種で胴部下方に風口の窓がつく箱形と、風口が舌状に出ている丸形である。焰炉は現在のフライパン形になったものである。豆や茶葉を炒ったものと考える。風口は七厘の内部に効率的に風を送る用具である。炭壺は過度の炭の消耗を保つ壺である。製作地は不明である。

### 4 土製品（第13図・巻頭図版2-2、図版9）

土製品には人形6点、像9点、臼1点、石臼1点、茶碗4点、釜1点、徳利1点、甕2点の25点が出土したが、内19点が破損している。これらは陶磁製と素焼き製で、いずれも型作りで、底面に空気抜きの穴がうがたれている。雛飾りや、箱庭道具、戯事道具となり、人形の210・211は釣人である。笠と蓑を被り、前面に竿を差す小穴がある。瀬戸美濃系の陶製である。214は太鼓を打つ膝立ち姿で、215は顎で神姿で正面を見据えた姿勢で五人囃の一部である。213は母子立像で母親に寄り添う形である。212は座姫である。「羽衣艸」とも呼ばれる。207・208は緑毛亀であり鶴に近く、208は首が亀首緑の毛を生した亀である。201は鶴である。これらは、雛段を設けて飾り遊ぶ道具である。206は箱庭道具の五輪塔である。戯事遊びと共に利用した道具である。臼、石臼、釜、茶碗等は飯食道具である。炊事を模倣した女子の代表的な遊びである。216は飾り馬である。

### 5 木製品（第12図・図版10）

木製品には、蓋（160）、下駄（161・162）、底板（156）、木栓（163・164）で、箸（166～168）、柄杓の柄（170）、桶の手引（169）、不明木製品（165）、「廣間」（158）と墨書きされた木片（158）、塗りの桶（159）、草花が描かれた漆塗り椀（157）が出土している。

### 6 石製品（第9・13図・図版8）

石製品では身体を温める温石（176）、硯（178～180）がある。

### 7 金属製品（第12図・図版9）

金属製品では釘（121～124）、火箸（125・126）、タンス等の手引や飾り金具（127～138）、煙管（139～150）、刀子（151～154）、古銭（第5図1～20）の出土が確認されている。煙管では139～143は雁首で、145～150は吸口である。煙管は雁首の形態で編年が示されており、脂返しが湾曲する139・143は比較的古い形態を示し、脂返しが極めて短く肩も無い140～142は新しい型といえる。古銭は34～26グリード層第IV層で一括して出土した寛永通寶（9～20）と、調査区第IV層より出土した洪武通寶、元符通寶、元豐通寶である。8・18～20はいわゆる文鏡である。

## V 調査のまとめ

本遺跡の発掘調査は県立高等学校校舎等整備事業（体育館）建設にかかる緊急発掘調査である。調査は城館跡を学校敷地としている中で実施されたが、亀ヶ崎城が幕末に廃城となってからは、明治政府による酒田県の県庁、旧制中学校の校地、戦後の新制高等学校の校地と、一貫して公の土地となってきたことから、比較的破壊が小規模なことから遺構の残りは確認できた。しかし、江戸時代の城代家老職が変わるとときや、明治時代からの施設整備による盛土が160cm以上にあったため、当初の調査計画での遺構確認に時間を要した。しかし、検出された遺構は礎石建物跡の一部と、列石一条が確認された。検出された建物跡の遺構は、眞室年中図として保存された亀ヶ崎城図に記載された位置と同位置に確認されている。調査区は絵図による城代家老職の屋敷地内とあり、検出された遺構や出土遺物は武家社会の様相を示した内容であった。以下に遺構と遺物に分け、まとめとする。

検出された遺構では礎石建物跡の礎石が径60cmから85cmと大きい偏平な自然石を利用している。太い柱を支えることや、EX-6性格不明遺構の角材が地中深く打ち込まれていることなど、大きな建物の存在を窺わせ、絵図に記載された城代家老職の屋敷跡として確認できる。また、列石は絵図に記載されている次席家老職屋敷との境界と考えられる。

出土した遺物で、出土層位から製作年代では、埋め土I層からは昭和の大政翼賛会の記念茶碗や旧制中学校時の湯呑み茶碗等、現代までの陶磁器が出土している。礎石が検出された第IV層からは、京焼写し（註1）とされる肥前鍋島藩窯で製作された陶器の碗や、同じ肥前系の磁器や唐津焼・瀬戸美濃焼系の陶器等が出土し、東北出羽国への日本海物流が認められ、きわめて豊かな生活が窺える。

製作年代からの時期では古いもので、江戸中期1650年代中頃から新しいもので幕末の1850年代の遺物が中心であった。出土磁器や陶器は更に細かな年代が当たられるが、今後に細分作業を課題としたい。

註1 京焼については、「京焼写し」・「京焼風」と呼称にあいまいさがあり、本書では、鈴木重治編「徳昭館地点・新島会館地点の発掘調査」 1992

第3章、第1節 考察 定義と分類 によった。

その他、本報告書の作成にあたり、遺物の器類や染め付け文様等の判断には、以下の報告書を参考にした。

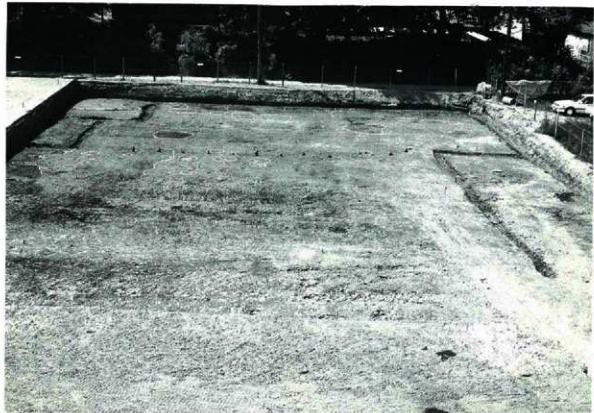
新宿区厚生部遺跡調査会編「細工町遺跡」及び「内藤町遺跡」 1992

扇浦正義著 「江戸発掘」 1993

報告書抄録

ふりがな	かめがさきじょうあとだい2じはくつちょうさぼうこくしょ							
書名	亀ヶ崎城跡第2次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第17集							
編集者名	野尻 侃・川田嘉信							
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301							
発行月日	西暦 1994年3月31日							
所取遺跡名	所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>		
亀ヶ崎城跡	山形県鶴田 市電ヶ崎	6204	2071	38度 54分 65秒	139度 50分 63秒	19930511～ 19930804	4,080	県立高等学 校校舎等整 備事業(体育 館)
所取遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 槽	主 な 遺 物	特 記 事 項			
亀ヶ崎城跡	城館跡	江戸時代 後期	礎石建物跡 石 列	1軒 1条	近世陶磁器	二の丸内の城代屋敷跡 を検出		
			陶器(碗、甕、壺、皿、鉢) 磁器(碗、皿、猪口、杯) 石製品(臼、鉢、温石) 木製品(箸、木挽) 鐵製品(釘、把手、煙管)	日本酒交易にもたらされた東日本の近世陶磁器が多量に出土し、江戸文化の多様性を伺うことができた。				

図版



調査区全景



遺跡の層序





R P 23陶質人形土製品出土狀況



R P 38亀形土製品出土狀況



R P 36鳥形土製品出土狀況



R P 59環洗い出土狀況



R M 46取手出土狀況



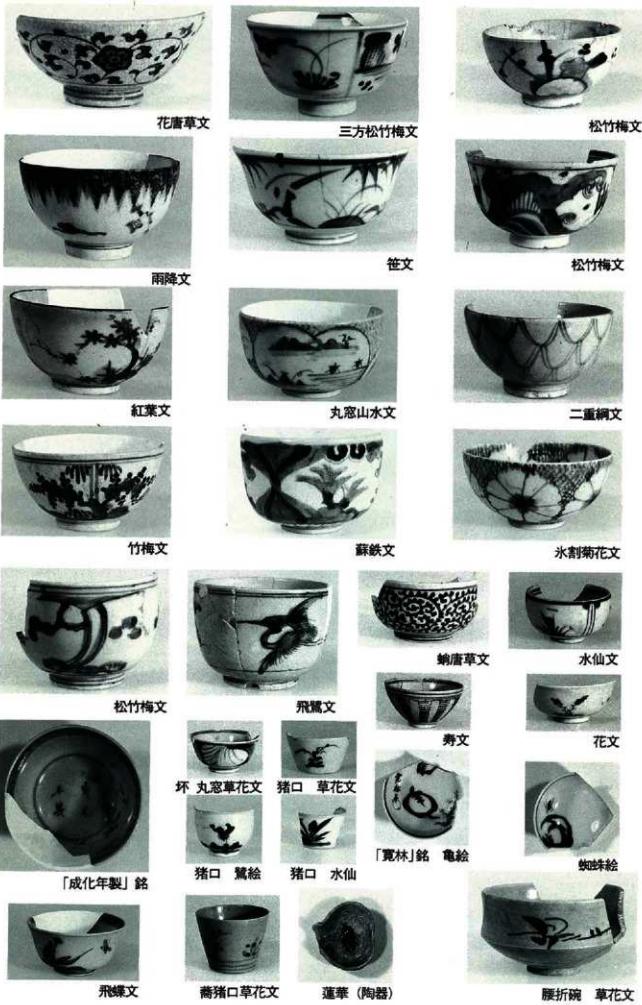
三島手唐津出土狀況



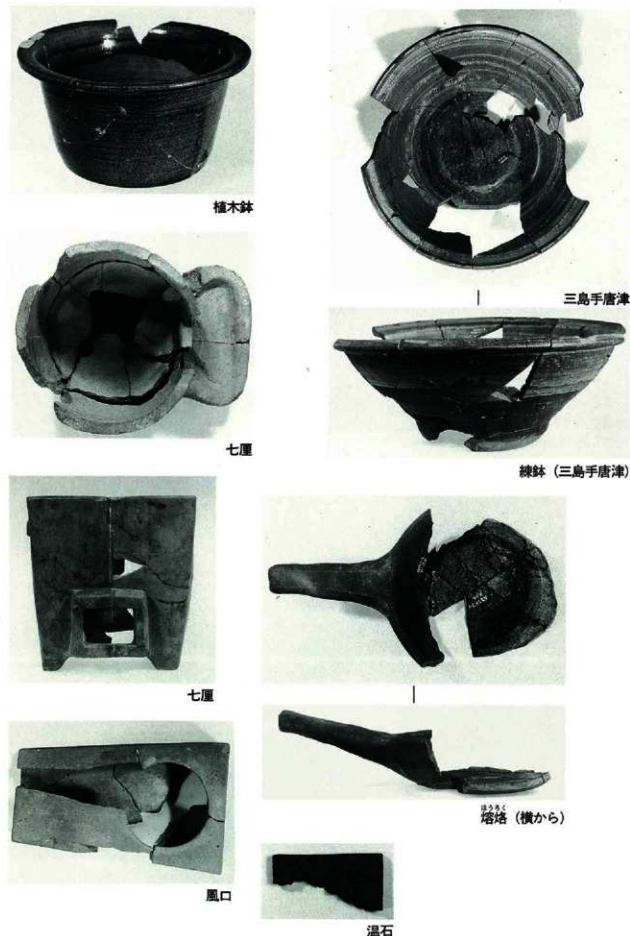
底板出土狀況

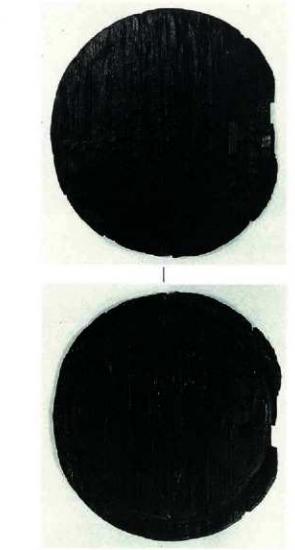


調査風景

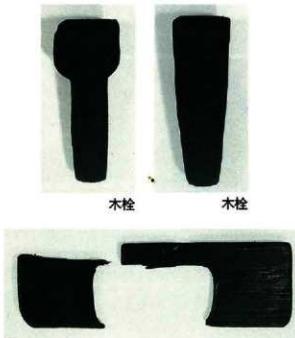
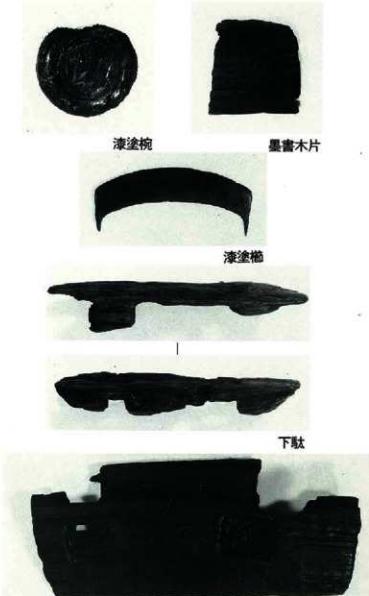




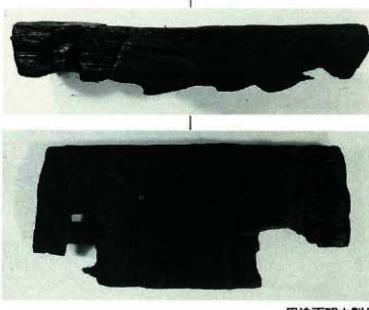




木蓋



木栓 木栓



用途不明木製品

種の取手

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第17集

龍ヶ崎城跡第2次発掘調査報告書

1994年3月31日 発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター  
〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号  
電話 0236-72-5301  
印刷 鮎大風印刷